

時間感覚の文化差とその起源——多国間データによる分析——

吉田雄貴

指導教員：結城雅樹教授

近年のグローバリゼーションにおいて、我々は今まで以上に異文化理解を促進する必要がある。異文化の人々を理解することは円滑なグローバルコミュニケーションへとつながるからだ。そのような文化を超えた交流の一助になるべく、異文化交流促進を目指し、本研究では人々の日常生活を取り巻く時間に焦点を当てた。先行研究において様々な時間の文化差は明らかになっているが、それが社会環境と結びつくことは少なかった。本研究では社会と時間感覚の関連を明らかにするために、様々な社会要因と長期志向、過去志向、現在志向、未来志向からなる時間感覚の国別スコアを用いて分析を行った。社会要因には関係流動性や国民1人あたりのGDP、国の貧困度、環境安定性など様々な指標を用意した。一方、時間感覚の尺度として用いたのは先行研究よりZTPI (Zimbardo Time Perspective Inventory) およびLTO (Long-Term Orientation Index) であった。分析を行った結果、社会要因と時間感覚の間に局所的ではあるものの相関が見られた。強い相関としては関係流動性と未来志向は負相関であった。他にも国民1人当たりGDPと未来志向が負相関、関係流動性と過去肯定志向が負相関、人間開発レベルと過去否定が負相関、農業雇用度と長期志向が正相関であることが判明した(全て両側5%で有意な相関)。このように社会環境と時間感覚の間には、ある程度の関連性があると言える。しかしその一方で、相関が見られなかった社会要因および時間感覚も存在している。将来に向けてより良い研究を行うためにも、今一度、時間感覚尺度の精査が必要である。これからのグローバル時代を生きていく上で、本研究がその真価を発揮することができたら幸いである。